

思いや意図をもって表現する子どもを育てる

～「かく」ことを通して歴史ある曲を身近に～

田辺 麻衣子

思いや意図をもって表現するための手立てとして「かく」ことが有効ではないかと考えた。「かく」とは、絵や言葉で感じ取った内容を表すことである。イメージしたことや考えたことを「かく」ことにより、自分や友だちの思いや意図に気付き、表現に生かすことができるのではないかと。また、名曲として古くから残っているものの多くは今の子どもたちにとってなじみがなく、聴いてすぐによさを感じられることは少ないのではないかと。そこで歌唱や鑑賞の中で「かく」活動を組み込み、絵や歌詞で表すことから曲想やよさにせまることができるようにした。主に『おぼろ月夜』『越天楽今様』の共通教材を軸にして取り組んだ。授業後の振り返りでは、歌詞や旋律の中に理由や根拠をみつけて素晴らしいと思うところや好きだと思えるところを書くことができた。

キーワード：かく、思いや意図、共通教材

1. 「思いや意図」とは

東日本大震災の後、音楽にはとても素晴らしい力があることを改めて考えた1年であった。自分やいろいろな人の心を豊かに元気にするために、「思いや意図」をもって歌うことのよさを考えさせられた。だからこそやはり、「思いや意図をもって」ことができる活動と「思いや意図を表現する」ことができる活動を積み重ねていくことが大切だと考えた。

○思いや意図をもつためには

- ・見る、聴くに加えて触れることを大切にする。さまざまな楽器に触れ、演奏することで音や音の変化に気付くようにする。
- ・歌詞に使われている言葉から風景や様子、状況を想像することで、作詞者の思いや意図を考えるようにする。
- ・様々な活動の中で音符、休符、記号や音楽にかかわる用語をどの子も理解できるようにしていくことで、作曲者の思いや意図を考えるようにする。

○思いや意図を表現するためには

- ・自分の表現を録音して確かめたり、工夫したり、聴き比べられるようにする。
- ・同じ曲で正反対の思いや意図を表現して比べることで具体的な表現技能を身に付けていく。
- ・朝の会で毎日音楽を表現する時間を確保する。

ここで重要になるのが焦点を絞ることである。ただ曲全体を何となく聴く・表現するのではなく、例えば、出だしの休符や何度も歌詞に出てくる言葉や効果的な音色など着目するポイントを示し、子どもたちが考えやすくなるようにしていく。この人はこんな思いでこの曲を作ったのか、演奏しているのか、また違う人が演奏したらこんな風に曲の雰囲気かわるのか・・・など1つの曲の背景や表現の仕方の違いを感じるこ

で、「自分だったらこんな風に表現してみたい。」という思いをもつことができるようになるのではないかと。また、「こんな表現の仕方もあるのか。」と気付いたり、「ぼくはこう表現したいのだけれど、実際に自分の表現を聴くとできていないな。」と確かめて改善したりする中から思いや意図を表現する技能を身に付けていくことができると考えた。そして、1人の子どもがもった思いや意図を全体で共有したり、一人ひとりの思いや意図の違いを受け入れ認め合ったりしながら、音楽が楽しいと思う子どもを育てていくことができると考える。

2. 「かく」ことを通して

「かく」ことを通して、思いや意図をもって表現できるように実践を進めた。

- ①感じたことを言葉や絵で表すことで、思いや意図を表現することができているか実践する。
- ②どの場面で「かく」活動を取り入れることが効果的であるのかを実践する。
- ③「かいた」ものを共有することでどのような学びの質の高まりが見られるのかを検証する。

3. 授業の実際

ここでは、題材『おぼろ月夜』(高野辰之作詞・岡野貞一作曲)と『越天楽今様』(慈鎮和尚作歌・日本古謡)について報告する。

3. 1. 今も受け継がれていることを知る

それぞれの題材で扱った共通教材の2曲は、今後も受け継いでいく「こころのうた」として教科書で扱われている。しかし、子どもたちにとってはなじみのない2曲であったので、まずは今、どんな人が歌っているのか、どんな楽器で演奏されているのかを知るとこ

ろから始めた。

『おぼろ月夜』は、マライアキャリーが英訳して歌ったり、ペーターハーバーマンとドイツ・ヴェルニゲローデ合唱団が日本語のまま歌ったりしている。また、中島美嘉は葉加瀬太郎とコラボレーションし、『朧月夜〜祈り〜』としてCDを発売するなど、現在活躍している歌手が多数この曲を歌っていて魅力を世に伝えていることを知った。特にペーターハーバーマンとドイツ・ヴェルニゲローデ合唱団のDVDを見たときには、母国語でない日本語で歌っていることに感動している子どもがたくさんいた。このように、教科書にのっている昔の歌ではなく、日本にとどまらず世界中の人に愛されている歌であることを知ることで、自分もこの曲を伝えていく1人であるという気持ちをもってほしいと考えた。

『越天楽今様』では、天理教さんに協力をお願いしてほんものの楽器に触れる体験をした。(図1) 事前アンケートでは「雅楽を知らない」と全員が答えていた。CDを聴いて「神社で聴いたことがある。」とほとんどの子どもが答えたが、演奏されている楽器については誰も知らなかった。演奏だけでなく、楽譜や音色の説明、演奏の仕方なども教えてもらった。(図2)

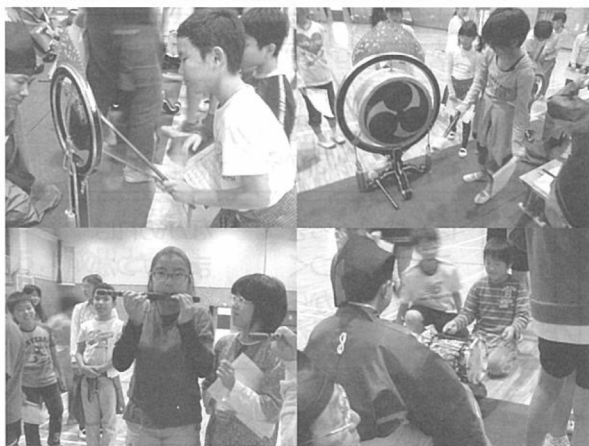


図1. 子どもたちの様子



図2. 演奏の様子

家庭学習で音色や楽器、歴史について調べていた子どもたちであったが、生音の迫りに圧倒されていた。筆箸の見た目からは想像できない大きさの音であったり、笙の不思議な音であったり子どもたちのワークシートを読むといろいろな気づきがあったことがわかる。

また、体験をしてみて音を出す難しさを痛感した子どもも多かったようである。

いくつか紹介する。

- ・1つひとつの音が違って合わなさそうなのに合っていた
- ・鞆鼓の真ん中をたたくのがすごく難しかった。
- ・笙の音がハーモニカに似ていた。でも、あの穴を間違えずにふさぐのはかなり難しそう。
- ・楽太鼓の両面に模様がついていてびっくりしたし、体育館中に響いたのがすごかった。
- ・鞆鼓の人が指揮者みたいなものと言っていたが、どんな風にしているのかは全くわからなかった。
- ・リコーダーよりちっちゃいのに、かなりの音が出ていてきれいだった。

この体験の後から、「市民会館で演奏しているのを聴いた。」「近所から似たような音楽がきこえる。」など、身の回りにある雅楽をみつけようとする姿勢がうまれた。

3. 2. 2つの題材における「かく」活動

『おぼろ月夜』では情景を読み取る手立ての1つとして「かく」活動を取り入れた。範唱CDを聴いた後、あえて日本の昔の田園風景の写真や映像は見せず、歌詞や旋律からイメージをふくらませ、自分が考えるおぼろ月夜を描いた。(図3・4)



図3. 1番の歌詞をもとに描いたワークシート



図4. 2番の歌詞をもとに描いたワークシート
絵に描こうとすることで、じっくりと言葉の1つひ

とつをかみしめ、作詞者の思いにせまろうとしたり、時間の移り変わりに気付いたりすることができた。

さらに、思い描いた絵をもとに『おぼろ月夜』の歌い方を考えた。グループで話し合い、大切に歌いたい言葉や旋律の盛り上がりを考えたり、静かに終わるにはどのような風に歌えばいいのかを決めたりした。さらに、考えた工夫を楽譜に書き込んで共有し、みんなで歌い合った。(図5) また、最初に歌った声の録音と聴き比べることで自分たちの歌声の変化に気付き、工夫することのよさを感じることができた。



図5. 考えた工夫を書き込む様子

次に、『越天楽今様』では、「今様」の楽しさを味わうために「かく」活動を取り入れた。『越天楽今様』の歌詞は子どもたちにとって難解であり、旋律も日本独特で今のものとはかけ離れている。そのため、子どもたちが楽しく何度も歌いたいと思える歌ではないことは明らかである。また、『越天楽』を聴くだけでは、どこに『越天楽今様』の旋律があるのか気付くことは難しい。さらに、興味をもって何度も聴くことが難しい曲だとも考えた。

そこで、曲にあわせて歌詞をつくれれば、七五調に気付いたり、限られた文字に季節の景色や様子を表したりするおもしろさを感じたりすることができるのではないかと考えた。(図6) さらに、自分の作った歌詞で歌うと原曲である『越天楽』にも興味が広がっていくと考えた。

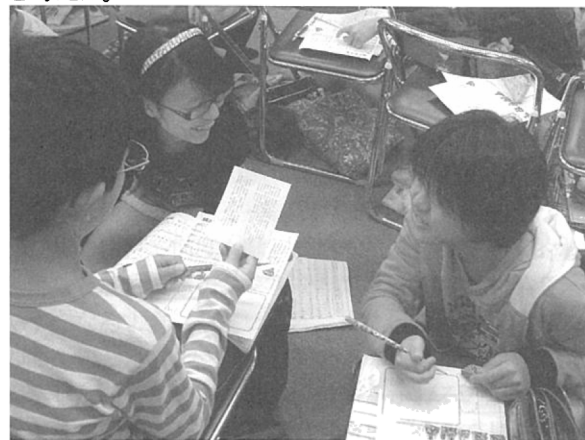


図6. グループで歌詞をつくっている様子

子どもたちに「今様」とは現代風という意味であることを説明し、歌詞を作るときにも平安時代の歌詞にとらわれないよう話をした。

まずは、各グループで何をテーマに歌詞を作るかを話し合った。春と夏の歌詞が教科書にのっていたので、秋の歌詞を作ることにした。たき火・運動会・満月・虫の声・紅葉などがテーマになっていた。次のような歌詞ができあがった。

テーマ 満月	やまのなかの うさぎがうかぶ ぼんやりひかる くもかかかりし	じゅうごやに おつきみに よるのほし おぼろづき
テーマ 運動会	あきのくがつの うんどうしょうを そろってならぶ はしてゆくぞ	あけがたに みわたせば こどもたち ゴールまで
テーマ もみじ	あきのへいせい あかいもみじが ライトアップに あーかくそーまる	ゆうがたに ちっている てらされる もみじあり
テーマ 虫の声	すすむしたちが こおろぎたちも あきのたのしみ まんげつみながら	ないている ないている じゅうごやの すこすとき
テーマ 満月	ぼんやりそらを うさぎもちつく ちへいせんから じゅうごやのひに	ながめれば まんげつが ひっそりと あらわれる

次に完成した歌詞で『越天楽今様』を歌った。少し恥ずかしいような様子も見せながら、各グループの歌詞を楽しみながら歌うことができた。もみじをテーマにしていたグループの歌詞に「平成」や「ライトアップ」などという現代の言葉が入っているのでこの歌詞が一番よかったという子どもが多かった。

4. 授業の考察

『おぼろ月夜』では、自分でおぼろ月夜のイメージをもつことが大切だと考え、写真や映像は用いなかった。「どんな場所を歌詞にしたのだろう。」という発問で子どもたちは絵を描いた。田んぼや山などいわゆる田舎の様子を描く子どもが多かった。また、歌詞に登場する鐘やかえるの鳴き声までも描こうとする子どももいた。歌詞の1つひとつに着目しているのだが、忠実に再現しようとして逆に図2のような『おぼろ月夜』のぼんやりした様子が表せないようであった。だから、おぼろ月夜の様子に限定したり、どんな色や形だろうと抽象的に描いたりするようにすれば、もっと『おぼ

ろ月夜』が生み出す情景にせまれていたかもしれない。

しかし、絵を「かく」という活動から、歌詞に使われている言葉やその意味について考え、「限られた文字なのに夕方から夜にゆっくり変わっているところがすごい。」と子どもの振り返りにもあるように時間の移り変わりを感じることができていた。頭の中で考えるだけでなく、実際に「かく」という活動を取り入れ、見える形にすることでより視覚的に様子を思い浮かべられるようになったと考える。

『越天楽今様』では、歌詞を「かく」活動を取り入れた。秋を表そうと歌詞をグループで考えた。実際にきれいな秋をイメージして作ることができていた。『越天楽今様』にふさわしい歌詞になるよう、趣のある言葉を選ぶことができた。また、自分たちが作った歌詞で歌うと、より『越天楽今様』を身近に感じる事ができた。

ただ、ゆったりとした旋律に歌詞を合わせていくのが難しいようであった。例えば、「月見バーガー」「秋の特番番組」などの現代の言葉がどうしても『越天楽』に合っている気がしないと歌詞を決めかねるといふ具合だ。『越天楽今様』の歌詞や旋律を捉えているからこそ、じっくりこないと感じる子どもが増え、実際に歌詞に使うことがなかったのだと推測している。今回は、平安時代と同じように七五調に合わせて歌詞を考えた。しかし、現代では1つの音符に1つの文字を当てはめて歌う曲はあまりない。「今様」に挑戦するのであれば、七五調に限定せず、今の時代にあった歌詞作りを行う方法もあったのではないかと考える。

5. 成果と課題

思いや意図を表現できる子どもを育てるために、「かく」ことが有効だと考え研究をすすめてきた。

歌詞を手がかりに、場所を想像して描くことで、自分の思いや考えをはっきりさせることができた。ただ、歌うだけでは場所や様子を想像することはあまりできなかったであろう。歌詞とじっくり向き合うことができたと考えている。しかし、実際に歌い方の工夫を考える場面になると、子どもたちは旋律のやまを決め始めた。「3段目を強く歌う」や「出だしははっきり大切に歌う」など、『おぼろ月夜』でなくても当てはまることを工夫として挙げた。中に「1番は夕方2番は夜になったから歌い方を変えたい。」という意見もあったが、多くは強弱についてのものであった。「かく」活動を表現にうまくつなげることができなかつたと感じている。

歌詞を「かく」活動でも同様である。『越天楽今様』に合う歌詞をかくことはできた。しかし、自分たちの歌詞で『越天楽今様』をどんな風に歌えばいいのか表現を工夫するところまでもっていくことができなかった。歌詞をかくまでに、楽器に触れたり、生音を聴いたり、歴史を学習したりした。また、歌詞をかくとい

うことは、曲を集中して聴き、そこに流れる楽器の音色や重なりを気をつけることになり、親しみをもつことにつながると考えた。子どもたちは学習する中で、音色の美しさに惹かれたり、歴史の重みを感じたりしながら雅楽に対するそれぞれの思いをふくらませていった。しかし、時代の隔たりが大きすぎて、子どもたちの思いと歌詞をかくことがなかなかつながらなかったのであろう。子どもたちが歌詞をかいている様子を見ると、自分たちが表したい様子はどの言葉だろうと考えるのではなく、どうすれば七五調に言葉を合わせられるかを一生懸命考えているというものであった。

子どもたちが『越天楽今様』を自分たちの歌と捉え、こういう場面を表したいと思えるようなさらなる工夫が必要だったのだろうと考える。歌詞のテーマを秋と限定せず、『越天楽』にふさわしいものを自分たちで考えるところからはじめてもよかつたかもしれない。あるいは、聴き手を意識した歌詞を考えるなどの進め方もあったであろう。

課題はたくさんあるが、「かく」活動は、考えたことが残るということである。残ることで、子どもたちは「この間、こんな風に思っていた。」と振り返ったり、「あのときはこうだったけど、今はもう違う考えだな。」と自分の変化を感じたりすることができた。

最後に、「かく」活動は新たなものを生み出す活動でもあると考える。頭の中に思い描いたことを言葉や絵で見える形にする。これは、言われた通りに歌う・演奏する・つくる・聴くよりも何倍もパワーを使うことだと考える。何倍もパワーを使うからこそ心に残るのではないかと。今回扱った2曲はどちらも共通教材で日本文化を受け継いでいくために大切なものである。6年生で学習して終わりではない。いつか『おぼろ月夜』を聴いてどこか懐かしいほっとしたような気持ちになったり、雅楽を聴いて歌詞をかいたことを思い出したりすることもあるだろう。「こんな歌・曲は知らない。」ではなく、「実は〇〇でね・・・」と次の世代へつなげようとする姿勢が身に付いたと信じている。

参考文献

和歌山大学教育学部附属小学校紀要

第33集 2009年3月

和歌山大学教育学部附属小学校紀要

第34集 2010年3月

秋田喜代美, 2010

教師の言葉とコミュニケーション 教育開発研究所

東儀俊美, 1999

雅楽への招待 小学館

田中健次, 2008

図解日本音楽史 東京堂出版